

Title	目的と情動は生の意味の理解にどのように関わるか
Sub Title	How is the concept of purpose and emotion related to the meaning of life?
Author	長門, 裕介(Nagato, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2016
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.9, (2016.) ,p.133- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20160000-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

目的と情動は生の意味の理解にどのように関わるか

長 門 裕 介

私たちが「人生の意味とはなにか」ということについて語ったり、その問いの意味を理解するにあたって、目的について言及することなしにそれを行うことは、およそ不可能である—こうした直観は、現代哲学において「人生の意味 meaning of life」に言及しようとする論者のなかである程度広汎に受け入れられているように思われる。特に、人生の意味の問題を幸福 happiness や福利 well-being の議論とある程度区別して論じようとする論者にとってこの直観は決定的に重要である。この立場をとる論者は、価値としての幸福や福利を、例えば態度的快樂のような個人の主観的な心的状態によって決定されるものに割り振り、有意味 meaningful であることの価値は、そうした心的状態とは異なる仕方、つまり本人が、自らの生において、世界との関わりのなかで展開する活動によって担われる、とする。そして、活動は典型的には何らかの目的を達成することに本義があるのだから、人生の意味の理解にとり、目的は極めて本質的だと考えられているのである。

本稿は、こうした目的論的観点から眺められた「人生の意味」論の意義を認めつつ、それに実質を与えるものとしてのやりがい fulfillment や情動 emotion が果たす役割を問い直してみようことを目的としている。ただし、あらかじめ述べておけば、ここでの実質を与えるとは、具体的に私たちがどのような目的を人生にもつべきかであるとか、ある目的を達成した生は別の目的を目指した生よりも価値があるとかを意味するものではない。こ

の作業を通じて目指されるのは、私たちが自分の人生を理解したり評価したりする際の基本構造と、生が有意味であるための最低限の条件の洗い出しに貢献することである。

1. 人生の意味問題における目的の役割

まず、人生の意味問題における目的論的理解とはどのようなものなのか、その内実を探ることから始めよう。

「人生の意味」とは何か、という問いに答えるにあたって、何らかの仕方ですべて「目的」という概念に訴えることが必要であるとする論者をここでは目的論者と呼ぶことにしよう。私の考えでは、目的論者は最低限の規定として次のことを認めなければならない。それは、

生の意味は、何らかの目的をもち、その目的の実現に行為者としての活動を通じて従事することによって得られる。

という規定である。もちろん、これは最低限の規定であって、実際には論者によってさまざまな条件が付け加えられる。例えば、スーザン・ウォルフやアンティ・カウピネンのような論者であれば、その目的が客観的ないし間主観的に認められる価値をもっていること（客観性要件）あるいはその目的が少なくとも何らかの意味で達成され、主体がポジティブに変化すること（達成要件）を追加条件として課すであろう（Wolf 2010; Kauppinen 2012）。あるいはクリスティン・コースガードや佐藤岳志のような構成的主観主義者であれば、そのような客観性要件や達成要件を満たさなくても、どのような欲求や原理からその目的が選択されたのか、そして主体がどのような仕方ですべてその目的に関わっているかを問題にすれば十分であるとするかもしれない（Korsgaard 2009, 佐藤 2012）。しかし、どちらの見解であっても人生における「目的」に重要な役割が与えられてい

ることは疑い得ない。

私の考えでは「人生の意味」への問いと目的がこのように強く結びついて理解されることには二つの理由がある。

一つは、ロバート・ノージックの見解に典型的なように「自己の外部にあるもの」ないし「自分自身を超えた価値をもつもの」との関わりが当人の人生の意味にとって重要であると私たちの多くが考えているからである (Nozick 1981:594-619)。このことは、人生の意味は当人の心的状態に尽きるものではないと考える論者にとって本質的である。そして、相当にラディカルな主観主義者を除いては、ほとんどの論者は人生の意味は私たちの心のなかで生じる経験によってではなく、世界に対する主体の関与から生じると考えるだろうし、そしてその関与は典型的には主体の自発的な活動から構成されるがゆえに、目的が要請されるのである。そしてそれは、当人がどのような理由からその目的を設定・選択し、どのような具合に活動にコミットしているか、という当人と世界の関わり方の問題でもあることになるだろう。

もう一つの理由は、アラスデア・マッキンタイアの見解に典型的なように、人生全体 *whole life* を理解しようとする際、私たちはそれを人生全体の部分である行為の理解と類比的に捉えるからである (MacIntyre 2007:chap.15)。私たちは行為の説明を展開されていく文脈ないしプロセスのなかに説明される当の行為を配置することによって行っている。例えば「卵を割る」「ボウルのなかでそれをかき混ぜる」といった個別の行為は「オムレツを作る」といったさしあたりの目的をもつ一連のプロセスのもとでのみ個々の関係が理解される (合理化される)。それと同様に、より長期的な幅を持つ人生全体というスケールで考えた場合にも、例えば「立派な医者として人々に尽くす」といった目的のもとでのみ、「医学部に入る」「国家試験のために勉強する」といった個々の行為が理解可能になる、と考えるのである。

以上で見たように「人生の意味」への問いが目的を参照するように導

かれることには一定の理由がある。そしてそれは、目的という観点から人生を眺めることによって何が得られるか、ということの答えでもある。

目的論的理解によって第一に得られるのは、上述したように目的を導入することによって人生のなかで生じるさまざまな出来事を一定の関心に従ってまとめることが可能になる、ということである。もちろん、いかなる目的のもとに人生を解釈したとしても、あるひとの人生で起きたこと全てを単一の目的の相に組み込むことが出来るようには思われない。しかし、何らかの目的なしには、当人にとって人生の眼目になるものを通時的に抽出することも出来ないようにも思われる。この意味で目的は価値焦点 *value-focus* の役割を果たしている。

もう一つは、当人が人生を通じてどのような目的をもち、どのような仕方でコミットメントしてきたか、についての理解はそのまま当人の性格やアイデンティティ、能力についての理解をもたらす、ということである。「人生の意味」についての問いは、単にその人がどんな目的をもっているか、だけではなく「なぜそのような目的を選んだのか」や「どのようにその目的にコミットしているか」という問いに対する答えも期待されている場合がある。先に挙げたコースガードのような構成主義者にとって、生の意味は、目的やその達成の存在以上に、目的へのコミットメントと選択される行為によってもたらされるものであった。もしそれが正しいとすれば、性格特性やアイデンティティの理解は人生の意味の理解にとって本質的であるし、またそれは快苦などの心的状態についての理解だけでは決してもたらされないような観点である。

以上をまとめれば次のようになる。私たちは人生に目的という観点を導入することによってのみ (1) 心的状態から得られる価値とは異なる「意味」を問題にすることができるようになり (2) 人生で生じるさまざまな出来事を意味の連関として分節化し (3) 行為者のアイデンティティへの理解がもたらされるのである。

2. 反目的論の視点

前節で論じたような目的論を採る論者に対して、むしろそのような目的（とその達成）というモデルこそが私たちを人生の意味の真正な理解から遠ざけてしまうと考える論者も存在する。このような立場に立つ論者を反目的論者と呼ぶことにしよう。

多くの反目的論者は、目的を設定しその実現へと邁進することによって、私たち自身の存在意義や私たちの活動の意義が増すどころか、むしろ目的のための道具に成り下がってしまうと主張する。例えば、モーリッツ・シュリックは「目的」という概念そのものを現代人（特に西洋人）のライフスタイルに取り付いた一種の強迫観念であると見ている。彼によれば、現代人はある目的を実現するための労働に心血を注いでいるが、その労働の目的はまたなにか別の目的に回収されるような網の目のなかにある。このような網の目にあつて、人間は結局本当に大事なものがなんなのか知ることなく死を迎えるのである（Schlick 1927=2008:63）。同様に、リチャード・テイラーも「シシュポスの神話」を引き合いに出しながら、もしシシュポスが岩を運ぶことによって何らかの（例えば山頂に寺院を建設するという）目的が果たされたとイメージしても結局のところそれは虚しさを引き起こす、とする。

長い間の辛い労働、最終的な成果を目指して行われたあらゆる事柄の後に、ついに寺院が完成し、いまやシシュポスは自分の仕事は終わった、とすることができ、休息し、その成果を永遠に楽しむことができる。[...] このイメージのなかに、私たちはシシュポスの実存、すなわち、途方もない労働をすることの眼目を見出す。なぜなら、私たちがそれを眼目だとしたからである。だが、それと同時に本当に価値ある *worthwhile* ものは完全に失われてしまったように思えるのである。（Tailor 2000=2008:140）

シュリックとテイラーの議論のポイントは、(1) 労働の目的はただちに別の目的の手段になってしまうし、(2) 仮に労働の究極目的が存在したとしても、その目的が達成されたならば後に残るのは退屈や虚しさのだけである、ということにある。人生に目的を設定した以上、この二種類の隘路のどちらかに必然的に迷い込んでしまう、というわけだ。

では、私たちは目的（とその達成）以外のどこから生の意味を得ることができるのか。容易に想像されるように、それは、「活動そのものへの献身、行為そのものへの没入」(Schlick 1927=2008:64)であり、「私たちの内側から出て来るものであり、外側から来るものではない」(Taylor 2000=2008:142)ものとしての自己目的的な活動の享受である¹。彼らにしたがえば、人生の意味は、活動の最終的な結果や生産物を考慮することなく「ただそれがそれであるが故に行いたい」という衝動から行為すること(シュリックはこれを端的に「遊び play」と表現している)によって得られることになる。

このような反目的論者の議論をどのように評価するべきだろうか。

一方で、反目的論的な議論は目的の達成に邁進するなかで忘れがちな、真に自発的な活動に目を向けさせ、失敗による挫折感や不満足に捕われてしまうことから私たちを守ってくれると考えることができるかもしれない。

他方で、ピーター・シンガーは自己の外部にある目的の達成というモデルを拒否し、問題の解決を自己の内面、心のもちようにのみ目を向ける姿勢を(シュリックとは逆に)現代人の「内に向かう傾向」として扱い、精神分析的な心理療法や人生の意味についてのテイラー的な解決を皮相なものであるとして、世界に客観的な善をもたらす倫理的な生き方を基盤の強いものとして推奨している² (Singer 1995:chap.10)。

実際のところ、このような反目的論的立場は現代においては単純なタイプの主観説と同一視され、あまり人気のないものとなっている。その理由の一つとして、目的（と達成）のモデルを拒否する代わりに彼らの差し

出す「自己目的的な活動の享受」を、なぜ「意味」と呼ぶのかについての積極的な説明がない、という点が挙げられるだろう。目的論者は、ある行為の意味について、それは目的という観点から理解可能になるというテーゼを立てた上で、行為と類比的に（あるいは人間が行う最も長期間に渡る行為として）生を捉える。これは「意味」概念についての分析を含んでいる。しかし、シュリックやテイラーの議論にはそのような「意味」概念の分析を見出すことはできない。「行為そのものに没入」するときに「私たちの内側」から出てくるものが単なる心的状態としての快楽ではなく「意味」であることについての検討がそこには存在しないのである。

3. 循環的な生と非循環的な生のウィギンズの区別

では、私たちの生の意味の問題は目的という観点の導入によって組み尽くされるのか。事情はそれほど単純ではないように思われる。デイヴィット・ウィギンズは、20世紀の実存主義者も含めて「私たちの内側」に生の意味を求めようとする論者は、まず「人生の真の意味とはなにか *what is the meaning of life?*」という問いを世界のなかに存在する「あらゆる価値がそこから取り出されてくるものはなにか」という問いに変換した上で、そうしたものが見当たらないと悟ることを出発点としていている。彼らはそうしたものが見つからないからこそアンガジュマンやアイロニーといったものを代用品として提示しているのだ、というわけである（Wiggins 1998:136）。

このような診断は概ね先のシンガーのものと軸を一にしているが、ウィギンズはシンガーのように〈大文字の善〉に回帰しようとはしない。そうではなく、ウィギンズは意味とは私たちが世界のなかに発見するものなのか、それとも発明 *invention* されるものなのかにまず適切に答えることが必要であるとする。そして、私たちが何かに価値を見出すという事態を真に人間的なパースペクティブから考えてみるならば、生の意味に目的は

不要だとする素朴な反目的論と同様、世界の方から天下り式に私たちに意味をもたらすような素朴な目的論も維持不可能であるとする。

ウィギンズの論はそれなりに複雑なものだが³、彼が提示した二つの異なる生のモデルを参照することから始めよう。

循環的生

より広大な土地を買うのはより多くのトウモロコシを育てるためであり、より多くのトウモロコシを育てるのは豚により多くのエサを与えるためであり、そしてそれはより広大な土地を買うためであり……という（経済学の教科書に載っているような）南部の畜産家の人生プラン

非循環的な生

好きな人と一緒に溝を掘るのを手伝ったり、日がな話し込んだり、飲んだりしながら、継続した歴史をもつ社会に貢献しようとする人生プラン

ウィギンズによれば、私たちは「内部的見方 inner perspective においては、こうした〔畜産家の抱く〕考慮と、非循環的な実践的推論ないし人生プランとの違い」に関して強い関心をもっているし、循環的生のよさがなんであるかを説明することは、非循環的な生のよさが何であるかを説明するよりも遥かに困難である、としている（Wiggins 1998:100-101）。私たちはとりうる複数の人生プランを吟味する上で、それぞれの人生プランが自らにとってどのように良いもの〔悪いもの〕であるか、あるいは何が重要であるかについて深い関心を寄せつつ、理由に基づいてどれかを選択し行動に移しているのであって、循環的な生と非循環的な生が全く等価であるとは考えないだろう。

しかし、このような（参与者）内部的見方ないし人間的見方に立てば

当然気づかれるような違いを、人生の意味の源泉を心的状態にのみ求める非認知主義者（≡反目的論者）は説明することができない。なぜなら、非認知主義者にとっては、問題となるのは当人の心的状態だけであり、客観的には参加者がどのような内容の目的にコミットし、その目的の達成どのような結果を生じさせるかだけでなく、その目的が実際に達成可能か否かについてすら関心の対象外だからである。つまるところ、非認知主義者は一方では「何が人生において重要であるかは私たちの心持ちが決めるのであって、客観的な価値がそれを判定するのではない」と主張しつつ、もう一方では「どのような人生プランを選ぶのかそれ自体はあなたにとって重要ではない」と述べていることになる。非認知主義についての前者の説に魅力を感じるひとであっても、後者のような説はあまり魅力がないものに映るだろう。ウィギンズはこの点に非認知主義の歪みを見ている。

さて、ではこの二つの人生プランの違いはじっさい何によって説明されるのだろうか。そして、何らかの意味で価値ある目的を設定し、その目的の達成にコミットする活動を通じてのみ意味が得られるとする素朴な目的論者はこの二つの違いを説明できるのだろうか。

ウィギンズは、非循環的な生において、友人を手伝って溝を掘ることの価値が派生的であるか否か、という点から始めて検討を行っている。これに関するウィギンズの説明はそれなりに晦渋なものだが、本論では意志と知性の関係という点から彼の説明を再構成してみよう。

非循環的な生のモデルにおいて、もし「溝を掘る」ということが何らかの手段としての価値、すなわち派生的な価値しかもたないのであれば、その価値が何から派生してきているのかを説明しなければならない。しかし、これは困難である。もし、時折主張されるように内在的に価値があるものが心的状態のみであるとするならば、この場合「溝を掘ること」の価値は、例えば満足感のような心的状態から派生している価値なのだ、と説明される。しかし、このような考えはウィギンズによれば誤りである。なぜなら、私たちの生きられた経験の内側 the inside of lived experience から

すれば、(1) そのような心的状態の多くは志向の対象をもち、(2) 本源的な価値が宿っていると想定される心的状態の多くは状態ではない対象を追求するのであり、(3) そのように経験される心的状態の本質は志向される対象に手段ではない価値を付与する点に存している、からである (Wiggins 1998:104)。つまり、真に参与者の立場に立つような人間主義的なパースペクティブからすれば、私たちが追求しているのは心的状態ではなく対象そのもののなのである。ならば「溝を掘ること」はそれ自体価値があることなのか。これもまたもっともらしくない。「溝を掘る」という行為は (例えば) 「水はけを良くする」といった別の目的に向けられた行為なのである。この難問を解決するには目的を供給する意志や感じ *feeling* と、事実の認知や目的-手段関係を推論する知性との関係が相互依存的である、という見解に立たなければならない。

実際のところ、彼が目的をもつことは、自分の好きな人を手伝うという課題に対して彼が感じることに依存している。しかし、その手伝うというプロジェクトに対して彼が感じることも同様に、溝を掘ることの目的の存在及びその達成可能性に依存している (Wiggins 1998:133)。

つまり「溝を掘る」という行為が動機づけられるには、水はけを良くするということが良い理由であると認知され、溝を掘ることによってそれが達成できるという実践的推論が前もって形成されている必要がある。しかし、それと同時に、行為者が「溝を掘る」という目的を保持するためには、例えば彼が隣人を手伝うことに喜びを見出している、といった情動についての事実もまた不可欠なのである。以上のように、目的の存在とそのよさの正当化が、知性と意志ないし感じとの共同によって説明されるのが、私たちが実践において採る内部的な見方としての価値の「発明」なのである。

それに対して、循環的な生のプランにおいては、それからこの部分を取り出してきても派生的な価値しか見出すことができず、また、いかに

して行為者がその目的の存在を認知し、いかにしてそのよさを正当化するのかについてのどのような説明も与えていないように思える。こうしたことが、循環的な生と非循環的な生のよさの説明についての違いに関わっている。

上述したように、ウィギンズ自身は、循環的な生と非循環的な生の違いについての以上のような見解を、人生の意味の最終的な源泉を心的状態に還元しようとする非認知主義者を批判するために取り上げている。しかし一方でこの見解は、人生に意味を与えるものとしての目的が純粹に客観的な、つまり私たちがその目的に対して抱く固有の関心や感じから独立した価値をもっているとする考えを拒否することも含意しているのである。

先に述べたように「人生の意味とはなにか」という問いが有意味であるとする論者にとっては、単なる心的状態とは区別された、世界に対する主体の関与から生じる価値が決定的に重要である。しかし、そうであるからといって、その価値が主体の心的な関心から完全に独立でなければならないわけではない。何らかの効用の観点からして世界にポジティブな影響を与えるからといって、ある人の生が単に他人のストレスのはけ口になるだけであったり、反面教師として見做されることだけから価値が生じているのだとすれば、そのような生を営むことを直接の目的として設定し、その目的の達成を目指して活動することが人生に意味を与えると考えることを拒否する理由がある。それはそのような生が単に道具的であるだけでなく、当人がそのような目的に対してどのように感じるかを無視しているからである。

4. 人生の目的と私たちの情動

このような考え方を受け入れたならば、私たちは「人生の意味において目的の存在は私たちの意志や情動と適切な仕方で結びついている限りで重要である」と述べることができるように思われる。そして、そう述べる

ことができたのなら人生の意味についての目的論と反目的論の対立はある程度調停されたことになる。

ただし、実のところ現代の人生の意味の議論の枠組みにおいてこれはそれほど強いインパクトのある主張ではないかもしれない。ウィギンズの議論によって斥けられているのは極めて素朴なアプリオリズムとしての目的論とその否定としての素朴な反目的論である。これだけでは、目的を価値あるものとして選択する際の実践的判断に一定の合理性要件を課すなどする洗練されたタイプの主観説を採るべきか、それとも主体のコミットメントに加えてその目的そのものが何らかの意味で客観的な価値と結びついている必要があるとする混合説を採るかは判断できない⁴。人生の意味に目的やその達成が一切関係ないと考える反目的論者も、主体の意志やコミットメントと関係なく単に目的の追求によって意味が与えられると考える目的論者も少数派だからである。また、主体が日々の暮らしのなかで「神の王国の地上での実現」のようなものに価値を感じ、そこから人生の意味を得るとするならば超自然主義を排除する必要もとりわけない。

だが、そのような主観説と客観説の対立という図式を離れてみれば、ウィギンズの論はなお興味深い点を残している。それは、価値の相関者として情動の役割に焦点を当てたところである。この点については、メタ倫理学の分野では感受性理論 *sensibility theory* としてジョン・マクダウェルを巻き込む形で、サイモン・ブラックバーンとの間に応酬があったことで知られているが、本稿では人生の意味を論じる文脈で目的としての価値と情動ないし「感じ」の関係についてウィギンズが触れていたことを重要視しよう⁵。

人生の意味と情動の関係は近年少くない数の研究があるが、少なくとも数の論者が情動を私たちの経験についての語りや反省、評価に本質的に関与し、それらの経験を構成要素とする人生から意味を見出す場面でも重要な役割を果たしていると位置づけている (Solomon 1993; Goldie 2012; 信原 2014)。これを説明する上で、例えば信原幸弘は次のような思考実験

を行っている。

偽りの情動

現在ではまだ存在していないが、脳科学の進歩に伴い将来的には情動を（例えば薬理的な介入によって）自由に制御することが可能になるかもしれない。そのような場合、日々の平凡なルーチンワークに退屈しきっている人が何らかの技術によって、それまでなんでもないと思っていた作業から多くの喜びを感じることができるようになる。また、その人が愛する何かを失っても、特に悲嘆や喪失感に暮れることなく平然と変わらない生活を送ることが出来るようになる。

これは今日、気分ないし性格のエンハンスメントの問題として盛んに議論されているものであるが、このような感情（情動）の人為的な制御が単にグロテスクであるだけでなく、人生の意味と関わるとすればそれはどうしてか。信原自身はこれに次のように答えている。

われわれは自分の身に起こったことにたいして、しかるべき情動を自ずと抱き、それをしっかり噛みしめるのでなければ、自分の生を生きたとはいえないように思われる。薬物で自由に制御した情動は自分の情動ではなく、したがってそのような情動に彩られた生は自分の生ではない。自分の生ではないものに自分にとっての人生の意味などあるはずもない。（信原 2014:24）

しかし、私はこの信原の説明にはいくつか曖昧な点があるように思われる。

まず、自分の情動とそうでない情動の違いは何に由来しているのか。思考実験では薬理的な介入を前提としているために、私たちの情動プロフィールの変更が不自然なものだと感じられるが、例えば病的に怒りっぽい

人が認知行動療法などの非薬理的介入によって、かつて怒りを感じていたような場面で怒ることがなくなっても「それは自分の情動ではない」と言えるだろうか。これはそれほど明らかではない。

次に、私たちが何に対してどのような情動をもちたいか、ということそれ自体が「私はどのような人間でありたいか」という仕方では人生の目的と関わっているということが問題になる。ある人は自分が善き医師であるためには人間の生と死について人一倍豊かな感受性をもつ必要があると考えるかもしれない。またある人は別の理由から日常の些細なことで心を動かされないような人間でありたいと願うかもしれない。私たちが自分のもっている情動プロフィールが「自分にとって」適切であるかは当人のもっている人生の目的に照らして判断されるのであって、アプリアリに決まっているわけではない。もし人が自分の人生の目的に照らして、熟慮の上で薬を飲んだのだとしたら、彼がその後の人生のなかで得る情動に彩られた経験は当人の人生の意味にとって本質的である。信原の回答はこの例を上手く説明できない。

とすれば、先の思考実験の問題は、ある感情が自分自身の（内側からの）感情かそうではない偽りの感情か（あるいは自然な感情か不自然な感情か）の問題ではなく、自分がどのような人間として生を送りたいかという目的と実際に自分が抱く情動が不協和を起していることに存するのではないか。子供をもつ父親が、自分の子供を育てることは価値があると考え、自分が善き親でありたいと願い、子供と過ごすことから安心感や充実感を得たいと思っていたとしても、実際の場面では子供を育てることになんどのやり甲斐も見出せず、子供と過ごす時間にいらだちや後悔の情動を抱くだけであれば、彼が外見上どれだけ標準的な親と同じ活動をしていたとしても、彼自身の人生に意味があるかは極めて疑わしいものになるだろう。私たちの情動と人生の意味の繋がりはこのように説明されるように思われる。

おわりに

今日、人生の意味に関する哲学的議論においては先人が組み立てた主観説と客観説の対立の枠組みを中心に展開されている。しかし、本稿ではそれについては（福利と意味を同一視する立場を除けば）オープンにしてある。本稿が目指したのは、そうした対立の解消よりも、私たちの日常の実践のなかで人生（全体）という表象がどのような役割を果たしているのかについて足がかりを作ることであり、そのために目的と情動を中心に考察を進めたのである。

本稿の議論を振り返ろう。まず、第一節では私たちが「人生の意味とはなにか」を議論する上で、目的という概念がどのような役割をもっているかを検討した。目的が人生の意味にとり重要な役割を果たしていることは疑いえない。目的は人生をその手段として達成されることを目指されるべきであるとともに、当人のこれまでの人生を一貫したものとして提示するためのパースペクティブを与えるからである。第二節と第三節では、素朴な目的論と素朴な反目的論がどちらも維持不可能であることを論じた。人生の目的は単に天下り式に私たちに与えられるのでもなく、私たちの意志や情動と適切に結びつくものである必要がある。ここでの価値と情動の適切さについては、第四節で気分エンハンスメントの問題を材料にすることで論じた。目的に照らして選び取られた人生プランは、必然的に「自分がどのような人間として生を送りたいか」ということを含んでおり、その限りでは「何に対してどのような情動を抱きたいか」といった情動プロファイルそのものに対する選好も含まれていることになる。ある人の人生が「その人にとって」無意味なものだと感じられるとすれば、それはある情動が抱かれてしかるべきときにそうした情動を抱けないことに由来しているのである。

（ながと・ゆうすけ 慶應義塾大学文学部非常勤講師）

How is the concept of purpose and emotion related to the meaning of life?

Yusuke NAGATO

This paper aims to show that the roll of the combination between purpose and emotion or sentiment is an essential matter to grasp the philosophical argument of meaning of life.

It has been recognized by quite a few philosophers that introducing the concept of purpose make human action intelligible, and the structural feature of human action bears a many resemblance to that of human life; On the other, some philosophers claim that the concept of purpose is an obsession and the meaning of life is from our self-sufficient desire, it is not bestowed from without.

To begin with, in light of two schools of thought, I argue that feeling something to be worthwhile and understanding a particular purpose corresponding to a whole life project is practically inseparable. Then I point out two remarks: (1) the question as “what kind of person should I be?” may develop into the question as “what kind of profile of emotion should I have?” in some cases. (2) we refer to the concept of purpose for evaluating the emotion itself. Based on these considerations, I suggest that the sense of meaninglessness derives from the gap between actual feelings and ideal profile of emotion.

-
- 1 ただし、テイラーは後年の論文ではこの見解を撤回している (Taylor 1987)。
 - 2 心理療法のなかで例外的に客観主義を採る論者としてシンガーは V.E. フランクルの名前を挙げている。
 - 3 ウィギンズは他にも様々な例を挙げて非認知主義の歪みを指摘しており、ここでの例は彼の議論のごく一部に過ぎない。ウィギンズの議論の全体像については邦訳に付されている訳者である古田徹也の解説が明快な展望を与えてくれる。

- 4 サディアス・メッツの分類によれば（彼は純粋な主観説でないものを一律に客観説に割り振るので）、ウィギンズはウォルフらと共に客観説に分類される（Metz 2013:163-164）。ウォルフの充足説は客観的に価値あるものに当人が意欲的に取り組み、そこから肯定的な感情を得ていることを人生の有意味性の条件であるとするものなので、これは一見ウィギンズの見解に近いものであるように思われる。しかし、ここにはやや微妙な問題がある。ウォルフにとって価値ある対象とはまずもって意識とは独立に存在しているものであって、私たちは事後的にそれを魅力のあるものとして意欲し、肯定的な感情を得る。それに対してウィギンズは、欲求や意志、情動といった私たちの志向的態度とその志向されている対象は厳密な意味での相関者であり、一方がなければ他方はない。この違いが人生の意味の議論にどのように影響するかについて議論するためには、まずもって価値についての存在論上の身分について込み入った議論をする必要があるだろうが、本稿で扱うことは出来ない。
- 5 もちろん、ウィギンズのメタ倫理学と人生の意味論は密接に関係している。ブラックバーンの投影説やマクダウェルの価値の二次性質論を含めた議論については大庭健の論文に詳しい（大庭 2004）。

文献表

- Goldie, Peter (2012). *The Mess Inside: Narrative, Emotion, and the Mind*. Oxford University Press.
- Kauppinen, Antti (2012). Meaningfulness and Time. *Philosophy and Phenomenological Research* 84 (2):345-377.
- Korsgaard, Christine M. (2009). *Self-Constitution: Agency, Identity, and Integrity*. Oxford University Press.
- MacIntyre, Alasdair C. (2007). *After Virtue: A Study in Moral Theory*. 3rd edition, University of Notre Dame Press. (アラスデア・マッキンタイア『美徳なき時代』篠崎榮記、みすず書房、1993年.)
- Metz, Thaddeus (2013). *Meaning in Life: An Analytic Study*. Oxford University Press.
- Nozick, Robert (1981). *Philosophical Explanations*. Harvard University Press. (ロバート・ノージック『考えることを考える』坂本百大監訳、下巻、青土社、1997年.)
- Schlick, Moritz (1927=2008). On the Meaning of Life. Reprinted in Klemke, E. D. & Cahn, Steven M. (eds.). *The Meaning of Life: A Reader*. Oxford University Press.
- Solomon, Robert C. (1993). *The Passions Emotions and the Meaning of Life*. Revised edition, Hackett.

-
- Singer, Peter (1995). *How Are We to Live?: Ethics in an Age of Self-Interest*. Oxford University Press. (ピーター・シンガー『私たちはどう生きるべきか』、山内友三郎監訳、ちくま学芸文庫、2013年.)
- Taylor, Richard (2000=2008). The Meaning of Life. Reprinted in Klemke, E. D. & Cahn, Steven M. (eds.). *The Meaning of Life: A Reader*. Oxford University Press.
- Wiggins, David (1988). Truth, invention, and the meaning of life. In *Needs, Values, Truth: Essays in the Philosophy of Value*. 3rd edition, Oxford University Press. (デイヴィッド・ウィギンズ「真理、発明、人生の意味」古田徹也訳、大庭健・奥田太郎編・監訳『ニーズ・価値・真理 ウィギンズ倫理学論文集』、勁草書房、2014年.)
- Wolf, Susan (2010). *Meaning in Life and Why It Matters*. Princeton University Press.
- 大庭健 (2004) 「意味への問と倫理学」、『岩波 応用倫理学講義 7 問い』所収、岩波書店。
- 佐藤岳詩 (2012) 「生の意味の問題における主観説について」、『倫理学研究』第 42 号、関西倫理学会。
- 信原幸弘 (2014) 「よみがえる情動の哲学」、信原幸弘・太田紘史編『シリーズ新・心の哲学 III 情動篇』所収、勁草書房。